

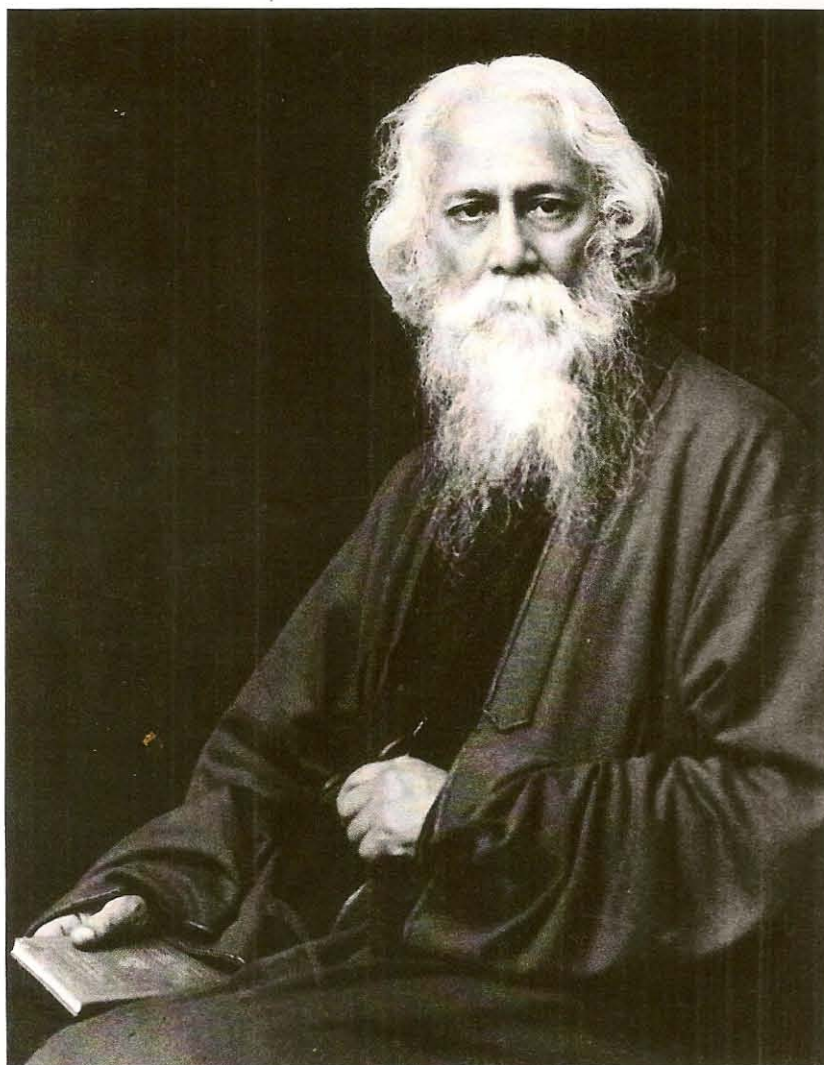
# Rabindranath Tagore 資料

出典：「タゴール展—偉大なる生涯とその芸術」

監修 我妻和男（当時筑波大学教授 / 元タゴール国際大学教授）

森本達雄（当時名城大学教授 / 元タゴール国際大学教授）

発行 西武美術館 1988 年



着物を着るタゴール Tagore in Japan

写真提供：Visva Bharati / 公益財団法人日印協会

タゴール生誕 150 年記念会 2011 年



## タゴール年譜

(西武美術館編)

1861年

5月7日、カルカッタのジョラシャンコ邸に生まれる。父デベンドロナト44歳、母シャロダ・デビ37歳。14番目の子で第8男。ロビンドロナトと命名され、略してロビと呼ばれた。



タゴール生家(現タゴール大学)



父デベンドロナト



母シャロダ・デビ

1864年—3歳

12月、次兄 ショッテンドロナト (1842-1923) 最初のインド高等文官として、イギリスより帰国。

1868年—7歳

オリエンタル・セミナリ学校に入学。後にノルマル・スクール。

1869年—8歳

詩を書きはじめる。

1871年—10歳

ベンガル・アカデミー という ピリンギ校に入学。勉強には不熱心であった。

1872年—11歳

ガンジス河畔のパニハティに家族で住む。その思い出は詩集『朝の歌』に見られる。

1873年—12歳

2月、カルカッタで父の主宰でロビを含めて3人の聖紐式。父と旅行、はじめてシャンティニク



タゴール(左端)と七兄シヨメンドロナト(右端)

トンに滞在。最初の詩劇を書く(原稿は散逸)。西ヒマラヤに向かい、アムリツアルに1カ月滞在、ヒマラヤのダルハウシーに2カ月を過す。サンスクリット語、英語、占星術を学ぶ。

6月、カルカッタに戻り、ベンガル・アカデミーに通う。

1874年—13歳

聖ザビエル学校に兄弟とともに入学するが、成果あがらず、長兄や家庭教師が教える。最初の長詩「願望」が、家族で出していた雑誌『トットボディニ誌』に発表印刷される。脚注に「12歳の少年の作」とだけ記されていた。

1875年—14歳

2月、ヒンドゥー・メラの年祭で詩朗読。



タゴール(14歳)

3月20日、母シャロダ・デビ没。

五兄ジョティリンドロナトの戯曲のため、「燃えよ 燃えよ 火葬の薪よ」という詩を書く。

文学雑誌『ギヤナンクル オ プロティビンボ』に長篇物語詩「森の花」を連載。

ラジナラヨン・ボシュとジョティリンドロナトが創立した「復活会」という秘密結社に参加。

1876年—15歳

聖ザビエル校で進級できず、学校へ行くことをやめる。

ジョティリンドロナトとベンガル北東部の一族の領地シライドホ旅行。

1877年—16歳

1月、イギリスはヴィクトリア女王をインド皇帝とすることをデリーで発表。

ヒンドゥー・メラでこれに対する諷刺長詩を朗読。

7月、長兄ディジェンドロナトを編集長とする文芸月刊誌『パロティ』刊行。ロビの様々な作品——歌、物語、散文が発表される。最初の短篇小説「乞食女」、未完の小説「憐み」、「バスマシンホの詞華集」など。

1878年—17歳

1-4月『パロティ』誌に「詩人の話」を発表。ショッテンドロナトが地方判事をしていたアーメダバードに赴き約4カ月滞在。イギリス留学に備えて英語を学ぶ。ヨーロッパ文学を英語で読む。『パロティ』誌に「英国人と英文学」、「ペトラルカとラウラ」、「ダンテとその詩」、「ゲーテ」などを寄稿。初めて自分の歌のために作曲する。

英語を磨くためにボンベイの次兄の友人の医師の家に行き、イギリス帰りの同家の令嬢の指導で2カ月を過す。

9月20日、兄とともにボンベイからイギリスへ旅立ち、兄の家族が住むブライトンの学校に入



英国留学中の  
タゴール(17歳)



学。英国社会生活と親密な関係始まる。

1879年—18歳

ロンドンに移り、リージェント公園に面した下宿で一人暮らし、家庭教師にラテン語を学ぶ。ロンドン大学で4カ月受講。議会でグラッドストーンやジョン・ブライトによるアイルランド自治問題についての熱弁を聞く。

英国体験の手紙、論文を『パロティ』誌に送る。長篇抒情詩「破れた心」に着手。

1880年—19歳

2月、兄とその家族とともに帰国。ジョティリンドロナトのオペラ「誇り高き女」のために歌をつくる。

「森の花」刊行

1881年—20歳

初めての音楽劇「バルミキの天才」。自らバルミキを演じた。



バルミキを演じる  
タゴール

4月、カルカッタのメディカル・カレッジ・ホールで初の公開講演。

4月20日、再度イギリスへ向けて旅立つが、途中、同行者の意見が変り、月末カルカッタに戻る。ムスリーに父を訪ねたあと、五兄とともにガンジス河畔の知人の別荘に滞在。カルカッタに戻り、詩集『夕べの歌』に収められたいくつかの詩を作る。

1882年—21歳

7月、プロモナト・ボシュの結婚式に列席したベンガル文学の泰斗ボンキムチョンドロが、『夕べの歌』を激賞する。ショドル通りの家にジョティリンドロナトの家族と住む。ここでのある日、霊的体験をし、詩「滝の目覚め」が書かれる。

秋、兄とダーズリンに旅行。詩「木霊」を書く。

1883年—22歳

5-6月、インド南西海岸カールワールにショッテンドロナトと2カ月過す。詩劇「自然の復讐」。

詩集『朝の歌』

12月9日、ベニマドブ・ライチョウドリの娘ムリナリニ（11歳）と結婚。



新婚当時の  
タゴール夫妻

1884年—23歳

4月19日、ジョティリンドロナトの妻、カドンボリ・デビの突然の死。深い悲しみに打たれる。

6月5日、三兄ヘメンドロナト没。

9月、父の命でブラフモ・ショマジユ(梵協会)の事務局長となる。

1885年—24歳

1月、カルカッタのシティカレッジ・ホールで宗教・社会改革者ラムモホン・ライについて演説。

4月、長兄の妻編集の児童向き月刊誌『パロク』発刊。実務はロビンドロナトが担当、童謡、詩、物語、戯曲、小説など種々の表現形式で毎月読み物を用意する。

12月、ボンベイで第1回インド国民会議。

1886年—25歳

4月、『パロク』誌をやめて『パロティ』と合併。

10月25日、長女マドウリロタ(愛称ベラ)誕生。

12月、カルカッタで第2回国民会議。「われら今日、母の呼び声に集えり」という歌をつくる。

詩集『長調と短調』

1887年—26歳

妻、娘、従兄弟、従姉妹をつれてダーズリンへ行く。テニソン、ブラウニングなどを読む。

1888年—27歳

マグ祭のため13の歌をつくる。

10月、シャンティニケトン・アシュラム(修業道場)創立。

11月27日、長男ロティンドロナト誕生。

1889年—28歳

4月、兄の勤務地ショラプルに住む。無韻詩の戯曲「王と王妃」を書く。

5月、プーナのカルカル教授の家に住む。

11月、家族とともにシライドホに小舟で行く。



長女ベラ、  
長男ロティと共に

1890年—29歳

8月、ショッテンドロナトらと第2回目のイギリス旅行、イタリー、フランスへも行く。出来たばかりのエッフェル塔に上る、11月3日帰国。

詩集『心の女』、無韻詩の戯曲「犠牲」。

12月7日、シャンティニケトンのブラフモ堂の基礎作り、ディジェンドロナトが祈り、ロビンドロナトが歌を歌う。

1891年—30歳

1月、次女レスカ(愛称ラニ)誕生。

6-8月、北ベンガル、オリッサを旅する。

12月、『パロティ』誌に代って新しい月刊文芸誌『シャドナ』を刊行。多くの作品が載る。

12月22日、シャンティニケトンにガラスの祈り堂創立、カルカッタから多くの人々が集う。

1892年—31歳

地主の仕事でシライドホにたびたび行く。

9月、戯曲「チットランゴダ」(12月にエメラ





デベンドロナトの法要でジョラサンク邸に集うタゴール一族

1906年——45歳

カルカッタの政治的興奮からはなれ、ボルブル、シライドホで過す。『ボンゴドルション』誌編集長をやめる。

4月、長男ロティンドロナト、農業・牧畜修学のためアメリカに向かう。ベンガル文学協会で議長に選出される。

8月15日、国民教育協議会設立（会長オロビン・ゴシュ）、前日、国民教育についてタウンホールで講演。

12月、カルカッタで22回の国民会議。スワラジ運動表明される。「平和・吉祥・不二」という題で演説。

詩集『渡し舟』



スワラジ運動  
当時のタゴール

1907年——46歳

国民教育協議会の求めに応じて、文学の諸原則に関する有名な連続講演を行う。これをまとめて「文学」としたほか、同名の「文学」、「古代文学」、「現代文学」、「民衆文学」を著す。

6月6日、三女ミラ結婚。娘婿を農業学習のためアメリカに派遣。

8月、唯一の長篇小説「ゴーラ」の最初の稿が

『プロバシ』誌に載る。

政治界で急進的傾向が強まり、ヒンドゥー、イスラムの対立的傾向が見えはじめる。タゴールは政治の前線から身を退く。各方面から非難が浴びせられる。「病氣と治療」などで自分の意見を述べる。

笑劇「冗談」、諷刺劇「からかい」。

11月、次男（末息子）ショミンドロナト、コレラで急死（13歳）。

1908年——47歳

2月、ベンガル州大会で議長、はじめてベンガル語で行われた。

5月、カルカッタのチョイトンノ図書館で「道と旅の費用」を読み、自分の立場を明らかにする。東西の融合についての論文「東洋と西洋」。

12月から翌年4月末まで、シャンティニケトンの祈り堂で毎朝瞑想し、連続的に宗教講話をする。

学園の生徒たちのための季節劇「秋祭り」、同名の物語を劇曲化した「王冠」。

1909年——48歳

1月、長女の婿がイギリス留学から戻る。

『ギタンジョリ』の詩が作られる。

9月、長男ロティンドロナト、アメリカから帰国、彼を連れて領地を見廻る。

戯曲「贖罪」

1910年——49歳

1月、長男ロティンドロナト、プロティマと結婚。

5月8日、シャンティニケトンで詩人の誕生祭が行われる。職員たちによる「贖罪」の上演。

8月、詩集『ギタンジョリ』刊行。

10月、シャンティニケトンで2回目の「贖罪」上演。

代表的象徴劇「王」

1911年——50歳

1月、カルカッタのオボニンドロナトの家をイギリスの画家ウィリアム・ローセンスタインとドイツの哲学者ヘルマン・カIZERリングが訪ねる（タゴールがヨーロッパで名をなす端緒）。

2月、詩が英訳され、「Modern Review」誌3月号に発表。

5月8日、シャンティニケトンで50回目の誕生日が祝われ、オジトクマル・チョックロボルティの書いた「ロビンドロナト」が読まれる（タゴール伝の最初の名著）。夕方、戯曲「王」が上演される。

10月、ヒンドゥー大学創設の提案について演説。



W. ローセンスタインらと共に

秋、外国訪問の計画をするが実現せず。国民会議で、タゴール作詞作曲の「人々みな心の」（ジョノゴモノ）が歌われる（次第に民族歌の共感を得て、独立後のインド国歌となる）。

1912年——51歳

1月28日、ベンガル文学協会の主催で市民ホールでタゴールの誕生祝祭。

2月3日、ベンガル文学協会の学生会員およびタゴール委員会の会員たちによる歓迎会。

3月、イギリス旅行が具体化するが、病気のため中止。シライドホで自作の英訳をする。

5月27日、ボンベイから出帆、長男夫妻も同行。

6月16日ロンドン着。ローセンスタインに『ギタンジョリ』の英語草稿を渡す。

同月30日、ローセンスタインの家で多くの文学者たちの前でイエーツが朗読し、人々は感動する。その中に若きエズラ・パウンドもいた。7月12日、インド協会で歓迎会。



W.B. イエーツ



エズラ・パウンド

イギリスに4カ月滞在して、10月28日にアメリカへ。1913年4月14日にイギリスに戻るまでの約6カ月、いくつかの重要な思想上の講演（翌年『生の実現』として刊行）。

11月、ロンドンのインド協会から『ギータンジャリ』（英語表記）をイエーツの序文をつけて750部出版。

12月、『ポエトリ』誌に『ギータンジャリ』の6



篇が掲載され、アメリカでもタゴールの詩が知られるようになる。

象徴劇「郵便局」、諷刺劇「不動城」

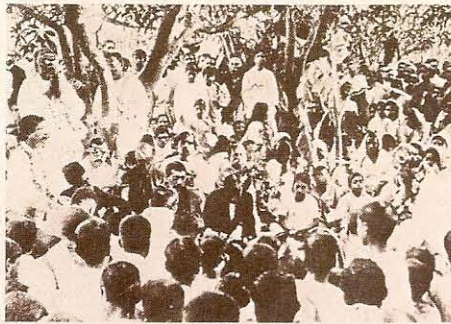
1913年——52歳

1月、シカゴに赴き「インド古代文明の思想」と「悪の問題」について講演。ロチェスターでの「宗教の自由主義者会議」に出席、「民族の争い」について講演。ハーバード大学で連続講演。4月、ロンドンに戻る。カクストン・ホールで連続講演。「郵便局」がアイリッシュ劇場で上演される。

詩集『園丁』、『新月』、戯曲『絵のような女』の3冊がこの年翻訳出版される。

9月4日、リパプール出帆、10月4日ボンベイに戻る。

シャンティニケトン滞在中の11月13日、ノーベル文学賞受賞のニュースが入る。23日、特別列車で500人もの人がシャンティニケトンに来て敬意を表すが、人々の祝辞に対して痛烈な謝



ノーベル賞受賞を祝ってシャンティニケトンに集まった人々

辞を述べる。

12月26日、カルカッタ大学から文学博士の称号。

1914年——53歳

1月24日、「下層階級と上層階級」という講演をアディ・ブランモ協会で行い、差別批判。

1月29日、スウェーデンから届いたノーベル賞をベンガル知事が授与。

3月、南アフリカからイギリスの宣教師W. W.



ノンドラル・ボシュ

ピアスンがシャンティニケトンの仕事に加わる。

4月14日、シャンティニケトンから1マイル離れたシュル村の新居に移る。

4月、C. F. アンドルーズ、ノンドナル・ボシュを迎える。

5月8日の誕生日に「不動城」の上演、詩人は師の役を演ずる。

7月、第1次世界大戦勃発。

8月5日、祈り堂で平和の祈りをこめた講演。

「私を殺さないで」。

11月、ガンジーの南アフリカのフェニックス学校の教師、生徒がシャンティニケトンに滞在。

詩集『歌の花環』、『音詩』

1915年——54歳

1月13日、カルカッタで父の年忌とマグ月祭の祈りをする。

2月17日、ガンジーが南アフリカからイギリス経由で帰国、シャンティニケトンに初めて訪れる。

3月10日、ガンジーの鼓舞によって学園の生徒たちは自律的な規則を受け入れる。

3月20日、ベンガル州知事カーマイケル卿がシャンティニケトンを見学。

6月3日、イギリス皇帝の誕生日にSirの称号を受ける。

9月、カルカッタでラムモハン・ライについて講演。

10月、家族とカシミール旅行。

シェイクスピア300年祭に詩を作り、11月29日に英訳をつけて発表。

1916年——55歳

1月30日、ジョラシャンコの家で飢餓救済のため切符を売って季節劇「春のめぐり」を上演。

2月、北ベンガルの領地でコレラの猖獗を鎮める努力。領地の中の村落発展の仕事再びはじまる。

3月、プレジデンシー・カレッジの紛争について「学生自治」を発表、弾圧に抗議。

4月、アメリカ講演旅行の招待。

5月3日、ピアスン、アンドルーズ、ムクル・チョンドロ・ディとともにカルカッタから日本船土佐丸で出発。船上で詩集『渡り翔ぶ白鳥』完成。ピアスンに捧げる。

5月29日、神戸港着。6月1日、天王寺公園公会堂で「印度と日本」を講演。村上華岳、神戸YMCAでタゴールに会い、肖像を描き始める。

6月5日、東京へ移り大観邸に宿泊。日本美術院で美術講話会および「ピチットラ美術学校インド画展」を開催。11日、東京帝大で「日本に対するインドの使命」を講演。12日、能を鑑賞、



上野寛永寺での歓迎会(1916年6月)

14日横浜へ移り、原富太郎の三溪園や箱根の別荘に過す。7月3日、慶応義塾で「日本の精神」を講演。8月、天心ゆかりの茨城県五浦に行く。



茨城県五浦にて

9月2日、横浜港からアメリカに向う。

9月18日、シアトル着。太平洋岸から太平洋岸まで多くの都市で講演。日米での講演は『国家主義』、『人格論』の2巻の論文集となって翌年に出版。クリーブランドのシェイクスピア庭園で植樹祭。

小説『家と世界』、『チョトウロンゴ』

1917年——56歳

アメリカからの帰途、2月3日、横浜港着。京都・奈良を遊覧して9日、神戸からインドへ向かう。

3月17日、カルカッタに戻る。

自治連盟の指導者アニ・ベズントがイギリス政府に逮捕される。

8月4日、ラムモホン図書館で「主の思召しのままの行為」の講演で人類的立場からベズント釈放を求める。

8月11日、アルフレッド劇場の集会で、愛国詩「国々を歓喜させ」を歌う。

9月5日、自由を得たベズントがタゴールに会う。

暮れの第33回国民会議の大会初日に、長詩「インドの祈り」を朗読。



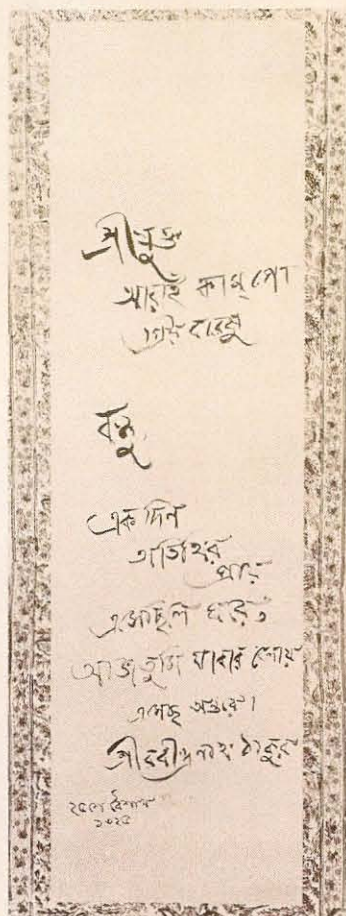
1918年——57歳

5月13日、長女ベラ没。

10月、シャンティニケトンの学校を各州間の文化研究の中心とする決意を表明、ビッショ・パロティ大学を構想。

12月、カースト相互間結婚法を支持して公開書簡を書く。

詩集『逃亡』、戯曲『心の師』



1918年5月8日、荒井寛方が1年半のインド滞在を終えて帰国の際タゴールから贈られた書(荒井家所蔵)。  
「荒井寛方氏へ／愛する／友よ／ある日、君は客人のように／私の部屋に來たつた／今日、君は、別れのときに／私の心の内奥に來た。ベンガル歴1325年ボイシャック月25日　ロビンドロナ・タゴール」(我妻和男訳)

1919年——58歳

1月5日-3月16日、南インドに旅行。3月10-12日、アーダイルのベズント夫人創立の国民大学で3つの講演。

4月、非殺生、非協力運動の危険はどこかについてガンジーに公開書簡。

4月13日、パンジャープ州アムリツアルで、ローラット法反対運動に対する市民虐殺事件が起こる。

インド総督チェルムスフォードに宛てて書簡を出し、Sirの称号を返還する(5月29日付)。翌日これを公表。

6月26日、ロマン・ロランの提唱した「精神独立の宣言」に賛同の署名をする。

7月、学園に芸術部を開く、サンスクリット学者ビドゥシェコル・ボッタチャルジョが長になる。

学園での芸術教育が本格化。ノンドラル・ボシ



学園の芸術教育風景

ュが参加、芸術学部(コラ・ボボン)が創設され、民衆音楽や舞踊が教えられる。

1920年——59歳

1月、ビッショ・パロティ創設のため多忙。

3月29日-5月3日、西インド旅行。

4月2日、グジャラート文学大会の議長として演説、ガンジーと交歓。

5月8日、カルカッタで59回目の誕生祭の後、外国旅行の準備。

5月15日、ボンベイから長男夫妻とヨーロッパへ向かう。6月5日、イギリス到着。

7月9日、ラムモホン・ライの墓に花輪を捧げる。

8月6日、パリへ。哲学者アンリ・ベルグソン、闊秀作家ノアイユ夫人らを知る。

9月19日、オランダへ。アムステルダム、ロッテルダム、ハーグ、ライデン、ユトレヒトなどで講演。ベルギーのブリュッセルで講演、パリに戻り、10月1日、ロンドンに。さらにアメリカに向かう。

10月29日、ニューヨーク着。11月10日、ブルックリンで「東洋と西洋の出会い」を講演。フィ

ラデルフィアなどでも講演。

戯曲「見えない宝石」(「王」の簡約化)

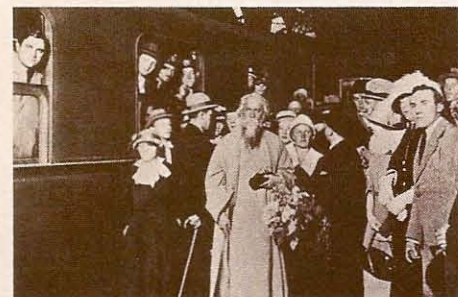
1921年——60歳

1月4日、ヘレン・ケラーと会う。ハーバードなどいくつかの大学で講演。2月1日、シカゴ。テキサスで15日間の講演旅行。このアメリカ滞在中に、コーネル大学農学部で学生であったイギリス人エルムハーストを知る(翌年、エルムハーストは、スリニケトン農村再建のために来印、指導にあたることになる)。

3月24日、イギリスに戻る。4月16日、初めて飛行機でパリへ。ロマン・ロラン、社会学者パトリック・ゲリスと会う。ギメ博物館で「インドの民族宗教」を講演。4月27日、ストラスブールで「森のメッセージ」についてジュネーヴのルソー研究所で教育に関する講演。

5月、ドイツの文学者、哲学者たちから、大学のために多数のドイツ語の本を誕生祝いの手紙とともに贈られる。

5月12日、ダルムシュタットの旧友カイザーリングと会う。20日、ハンブルグで講演。英米特にイギリスでの冷淡さ(Sirの称号返還のため)にくらべて、敗戦国ドイツでのタゴール歓迎は



デンマークにて

異常なほどであった。

5月21日、デンマーク。23日、コペンハーゲン大学で講演。

5月29日-6月4日、ベルリン。2日、3日ベルリン大学で講演。5日、ミュンヘンでトーマス・マンらと会う。7日、ミュンヘン大学で講演。講演料と印税2万6千マルクを戦禍に苦しんだ子どものために寄附する。

このあと、フランクフルト、ウィーンなどで講演、チェコのプラークに数日滞在。

7月1日、フランスからインドに向かい、16日ボンベイ着。

ガンジーによる非協力運動の様相を憂慮して「Modern Review」誌や講演で批判したため、国内で非難を浴びる。ガンジーも「Young In-





チェコスロバキアにて



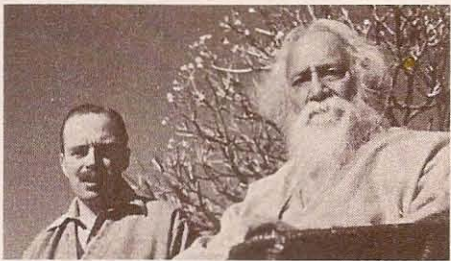
ガンジーと共に

dia」誌で反論。

9月6日、ガンジー、カルカッタを訪れ、ジョラシャンコで会談、ピアスンが立合う。

9月26日、ピアスン5年振りで学園に戻る。翌日にはエルムハーストが来る。

11月10日、フランスの仏教学者シルヴァン・レ



エルムハーストと共に



スリネクトンの農村再建部

ヴィが夫人同伴で来印。最初の客員教授となる。12月23日、ビッショ・パロティが正式に開校。戯曲「借りの返済」(「秋祭り」の改作)

1922年—61歳

1月、文明批判的、予言的性格の強い戯曲「自由の流れ」を完成。

2月6日、スリネクトンの農村再建部創設開始。エルムハーストが最初の長となる。創立の資金はアメリカから。

2月17日、モリエール生誕300年祭を開き、講演する。

9月17-18日、カルカッタの舞台で「秋祭り」の上演。タゴールも出演する。

9月、西インドから南インドへ旅行、ボンベイ、プーナ、マドラスなど。最後にスリランカに渡り、約1カ月。帰路、12月10日、アーメダバードのサーバルマティーにガンジーのアシュラムを訪ね、講演(この時、ガンジーは獄中にあった)。

この年、学園の外国人教授・職員はピアスン、アンドルーズ、エルムハーストの他、レヴィ夫妻、オーストリア人の人類学者ヴィンターニッツとその弟子のチェコ人レズニー、芸術家のS. クラムリシュ、ユダヤ女性の児童教育家S. フラウン、イスラム史のロシア人L. ボグナノフ、言語学者M. コリンズなどで早くも国際色豊かになる。

詩集『幼な子ボラナト』

1923年—62歳

1月9日、次兄ショッテンドロナト没。

ベンガル総督リットン卿が学園を見学に来るが非協力教授たちが歓迎会欠席。

2月22日、音楽劇「春」。ノズル・イスラムに捧げる(ノズルは当時獄中)。

3月、北インド、西インド旅行。

4月14日、ロトン・タタ卿から得た資金で客員教授たちのゲストハウスの礎石を作る(現在のロトン・クティ)。

4月から季刊誌『ヴィシュヴァ・バーラティ・クォーターリー』を出す。

4月26日、アッサム地方シロンへ2カ月の旅。この地で後の戯曲「赤い夾竹桃」の草案。

9月30日、イタリアで列車事故のためピアスン死亡の報が届く。

1924年—63歳

1月、スリネクトンで日本人笠原金次郎が作ったパニヤンの樹の上の木の家に住む(笠原は農園、家具科科长として一生そこで奉仕する)。

2月6日、スリネクトンで市が開かれる。

3月1-3日、カルカッタ大学で文学に関する3つの講演。

中国、北京の講演委員会の招聘で、キティ・モホン・シェン、ノンドラル・ボシュ、エルムハースト、カリダス・ナグと共に出発。ラングーン、ペナン、クワラルンプールを経て4月10日香港着。広東から革命政府首班の孫文から招待と歓迎の言葉を得るが、時間不足で実現せず。上海、漢口で講演。17日上海に戻り、日本人たちの会で日本の帝国主義と西洋の行き過ぎた物質主義を非難。

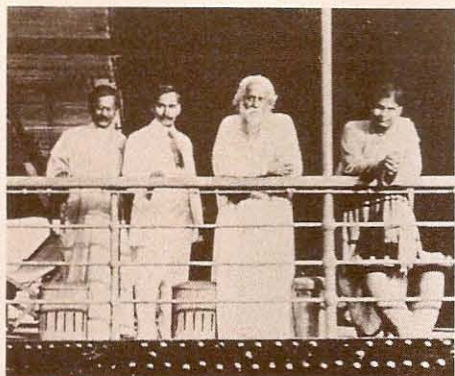
南京を経て23日北京到着。夥しい人々による前代未聞の歓迎にイギリスのジャーナリズムが驚く。アングロ・アメリカン協会や学生の会で演説。

5月8日には北京で誕生祝賀会。北京で4つの講演。20日北京を去る。

5月30日、上海から2回目の日本への旅。

5月31日、長崎着。別府に滞在、福岡、下関、神戸、大阪、奈良、京都を経て7日東京へ。東京駅で大歓迎。

各所で講演、日本の伝統文化に敬意を払うと同時に、西洋帝国主義模倣を批判し、賛否両論が



上海から上海丸で長崎に到着、キティ・モホン・シェン、カリダス・ナグ、ノンドラル・ボシュと。



ラシバリ・ボシュ、中村屋の相馬夫妻と共に



起こる。

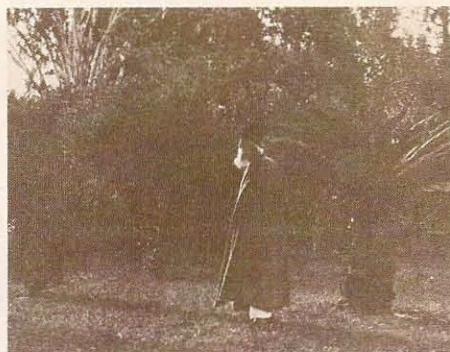
亡命インド人革命家 ランビハリ・ボシュと会う。

6月11日、神戸から日本を去り、7月21日インドに帰る。

8月、9月はシャンティニケトンで主に過す。

9月、この旅の結果として、アジア統一の理想覚醒のためアジア協会が組織される。

ペルー共和国から独立100年祭に招聘を受け、コロンボを9月18日出帆、マルセイユ、パリを経て10月18日、ヨーロッパ出帆、3週間の船旅。『夕べのメロディー』となる詩を作る。病いを得て、アルゼンチンのブエノスアイレスに上陸、ペルー行きを断念。



サン・イシードロのヴィクトリア・オカンボ邸にて

ヴィクトリア・オカンボの邸宅に滞在して休息する。ここで『夕べのメロディー(プロビ)』の多くの詩が作られ、翌年の詩集がこの婦人に「ビジョイ」(ヴィクトリアに相当する梵語)の名で捧げられる。

12月30日、アルゼンチン大統領と会う。

1925年——64歳

1月4日、アルゼンチンを出帆、21日イタリアのジェノバに。ミラノで音楽についての講演。

29日からヴェニスに数日滞在。

2月17日、インドに戻る。

3月4日、五兄ジョティリンドロナト没。

5月29日、ガンジーがシャンティニケトンを訪れる。

10月5日、ロマン・ロラン60歳誕生記念の本のために執筆。

11月21日、イタリアの東洋学者カルロ・フォルミーチとジュゼッペ・トッチが客員教授としてイタリア語の多くの本とともに来る。

12月19日、第1回インド哲学会の議長として講演。24日、ビッショ・パロティ創立記念日に講演。

社会劇「入居」

1926年——65歳

1月、ラクノウでの全インド音楽大会に出席。

18日、長兄ディジェンドロナトの訃報届く(86歳)。

3月9日、フォルミーチ教授の送別会。

4月、シャンティニケトンで講演。

5月7日、65歳の誕生日にさまざまな国のしか

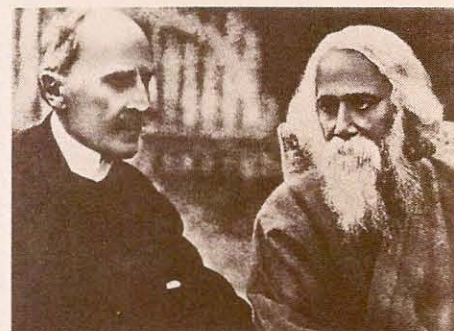


イタリアにて

るべき人々の祝福を得る。夕方、即興的に出来た戯曲「踊り子の礼拝」を上演。

5月12日、フォルミーチ教授の招待を受け、15日ボンベイからイタリアに向かう。

5月30日、ナポリ着。6月7日、ローマ政府招待の市民集会で歓迎。8日、芸術に関する講演、ムッソリーニはじめ有名人が出席。11日、皇帝イマヌエル三世に謁見。13日、ムッソリーニとインタビュー。15日、たつての望みで拘禁中の哲学者ベネデット・クローチェに会う。フィレンツェ、トウリンで講演。



ロマン・ロランと共に

6月21日-7月8日、スイスのヴィルヌーヴに。ロマン・ロランの住居近くのパイロン・ホテルに滞在。毎日のようにロランが訪れて語り合い多くの有識者と会う。

7月10日、ウィーンに。イタリア人たちから、ムッソリーニのファシズムの暴虐を聞く。

ウィーンから、パリ経由でロンドンへ。ローゼンスタイン、エルムハーストラに会う。彫刻家ジェイコブ・エプスタインが詩人の像をつくる。イギリスに3週間滞在して、ノルウェーへ。スカンジナビア諸国を廻る。



アインシュタインと共に

9月9日、ドイツ、ハンブルグで講演。ドイツの各都市を廻り、ヒンデンブルク大統領に会い、アインシュタインと知己になる。ここで、ムッソリーニとその体制に反対する手紙を書き、「マンチェスター・ガーディアン」紙に載せる。プラハ、ウィーン、ブダペスト、ベオグラード、ソフィア、ブカレスト、イスタンブールを経てアテネと遍歴を続け、11月28日にカイロ、国王ファード一世は、大学のためにアラビア語の書籍多数を送る。

スエズを通過して12月帰国。カルカッタ市長の主催で広汎な歓迎を受ける。

戯曲『純潔を誓った会』、『決算』、『赤い夾竹桃』

1927年——66歳

1月28, 29, 31日にジョラシャンコで「踊り子の礼拝」を上演、シャンティニケトンの女子学生たちの初の舞踊上演。

3月、西インドを旅行。28日、パーラトブルのヒンディー文学会議の議長。

4月11日、シャンティニケトンに戻る。

5-6月、アッサムの避暑地シロンに過す。小説「三代記」を書きはじめる(3部作から成る予定だったが一代の物語だけで中断、1929年に『不思議な暗合』と改題して出版)。

7月12日、カルカッタからマドラスを経て東南アジアへ向かう(タゴール国際大学の理念を説き、協力を仰ぐ講演旅行)。

シンガポール、マラッカ、クワラルンプール、ペナンなど8月半ばまでマレー半島の多くの都市で講演。

8月17日、スマトラ島、シンガポールに戻って





ボロブドールの遺跡にて

からジャワ島、ジャカルタを経てバリ島に2週間滞在。

パンドン、ジャカルタを経て、9月30日ジャワを去る。

ペナンからバンコクへ。10月8-14日多くの集会に参加、王、王妃とも会う。チュランコロン大学で講演。ペナンを経て27日カルカッタに戻る。

詩集『おりおりの小詩(レコン)』。

1928年——67歳

1月、婦人団体協会創立の日、議長としてシャンティニケトンへ。

3月、文学者の会で、ベンガル文学における近代性について講演。

4月、祈り堂で講演。

5月12日、オックスフォード大学で連続講演に招かれるが、マドラスまで来て病いに罹ったため、アニ・ベズントの客としてアディヤールで休養後、船でスリランカへ。コロンボに滞在するが体の回復はかばかしくなく、イギリス行きを断念して帰国。

旧友の哲学の権威で、マイソール大学副学長であったプロジェンドロナト・シルのバンガロールの家で3週間過す。ここで小説『不思議な暗合』を書き終えるとともに、もう一つの小説「最後の詩」も完成。

7月、シャンティニケトンに帰る。14日、「植



シャンティニケトンの植樹祭

樹祭」が行われる。そのために五元素の象徴の5つの詩を書く。次の日、スリニケトンでは「耕作祭」(この2つの祭りは今も毎年催され、近郷やカルカッタから多くの観光客が訪れる)。

8月、日本からの帰途、シルヴァン・レヴィが訪れる。

12月17日、インド総督がシャンティニケトン見学。

この年頃から、楽しみのために絵を描く。

1929年——68歳

1月27日、ブランモ協会の100年祭を記念して国際的宗教大会を開始。

2月6日、スリニケトンの年祭の後、協同組合大会で講演。

カナダの国民教育協会の3年毎の大会での講演に招待され、ボンベイを出帆、3月22日門司を経て、24日神戸に上陸、28日横浜から出帆。

4月6日、ビクトリア港着、夕方そこで講演、10日間多くの講演をする(「有閑哲学」「進歩の協力な精神」など)。18日、バンクーバーからロサンゼルスへ。多くの大学から講演招待を受けるが、パスポートに関するトラブルに嫌気がさしてアメリカを去る。

5月10日、横浜着。日本女子大、日印協会、津田



エルムハースト、渋沢栄一らと共に(日本女子大にて)

塾、水戸で講演。その他さまざまな講演。大隈重信、渋沢栄一、ラシビハリ・ボシュと会う。

「有閑哲学」の講演もする。

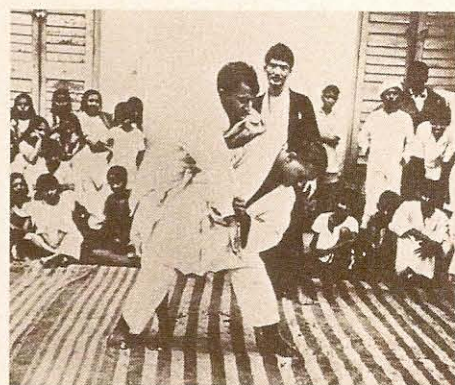
6月7日、横浜でインド人たちの歓迎を受け、8日に出発、サイゴン、マドラスを経てカルカッタに戻る。

8月、シャンティニケトンで「王と王妃」を大幅に改作した散文劇「トポティ」完成。植樹祭、耕作祭の2年目。

9月26、27、29日、10月1日、ジョラシャンコで「トポティ」上演、タゴールも出演。

11月、日本から柔道の高垣信造六段が来る。

詩集『モファ』



柔道を指導する高垣信造(六段)

柔道の練習場となったホール



1930年——69歳

1月、北インドに赴きバローダで「芸術家としての人間」を講演。

2月6日、スリニケトンの祭、エルムハースト夫妻が来る。10日、ベンガル知事、スタンレー・ジャクソンによってスリニケトン協同組合員大会の発会式。

3月2日、前回果たせなかったオックスフォー



ヴィクトリア・オカンボらと共に(パリ、ピガール画廊にて)

ド大学での講演のためイギリスに向かう。26日マルセイユ着。モンテカルロの近くに滞在、気の向くままに絵を描く。

5月2日、ヴィクトリア・オカンボの援助で、パリのピガール画廊で絵画125点の展覧会が開かれ、批評家たちから好評で迎えられた。3日、



ラジオで放送。10日、ロンドンのバーミンガム協会の客となり、19日から講演はじまる（翌年『人間の宗教』として出版、ドロシー・エルムハーストに捧げられた）。

6月4日、インディア・ハウスで展覧会。

ロンドンのいくつかのところで講演。

7月11日、ベルリンでラジオを通じて演説。14日、アインシュタインと長時間話し合う。16日展覧会。ドレスデン（17-19日）、ミュンヘン（19-24日）で歓迎会、展覧会、フランクフルト、マールブルク、コブレンツで講演（24-8月6日）。



モスクワにて

8月7日、デンマークへ。9日コペンハーゲンで展覧会。

ジュネーブで1カ月休養し、ソヴィエト政府の招聘でモスクワへ向かう。9月11日からモスクワに滞在。12日作家協会主催の会、多くの知識人に会う。14日孤児院で自らの作詩作曲「ジョノゴモノ」（後のインド国歌）を歌って聞かせる。17日展覧会。さまざまな施設や協会を見学。9月25日、ドイツへ。ベルリンに数日滞在し、10



ヘレン・ケラーと共に

月3日ハンブルクからアメリカへ。

10月10日-12月18日、アメリカに滞在。ニューヨーク、ボストンなどで歓迎会、講演会、展覧

会。ヘレン・ケラー、アインシュタインと会う。12月18日アメリカを発ち、23日イギリスに戻る。ロンドンでは最初の円卓会議（11月12日から）が開かれていた。



バーナード・ショウと共に

1931年—70歳

1月8日、バーナード・ショウと会い、長い討論をする。ロンドンに1年半ばまで滞在し、31日に帰国。

3月17, 18, 19, 22日、2人だけの音楽劇「新しきもの」上演。2月、3月に38の新しい歌をつくる。

5月8日、誕生日に演説。

5-6月、ダーズリンに滞在。

9月16日、警官の発砲でヒジリ郡で2人の政治犯死亡。カルカッタでの抗義集会で激しい非難の演説。

10月2日、シャンティニケトンでガンジーの誕生日を祝う（ガンジーは第2回円卓会議でロンドン）。

秋にベンガルの織工について論文。

12月25日、タウンホールで7日間にわたる生誕70年祭。展覧会でタゴールの絵、インドで初公開。27日歓迎会でロモノンド・コッチョパッドエ編のThe Golden Book of Tagoreが捧げられる。多くの協会から挨拶。

詩集『森のメッセージ』、舞踊劇「厄払い」

1932年—71歳

1月4日、円卓会議から帰国して1週間もしないうちにガンジー逮捕され、プーナの刑務所に送られる。その報せて誕生祝いの市を中止。イギリス首相マクドナルド宛に抗議の電報を打つ。つづいて1月26日声明文を出す出版検閲で全文公表されず、傷心の思いを「疑問」という詩に託した。

ガンジス河畔のコロドホに住み、自分の、また

他の芸術家の絵に触発された詩を多く書く。のちにこの詩集をノンドラル・ボシュの誕生日に捧げる。

3月22日、シャンティニケトンで春祭り。

4月11日、イラン国王パーレヴィーの招待で飛行機で出発。13日ブシャルで州知事らの歓迎。16日詩人ハーフィーズの墓に花と水を捧げる。ペルセポリスを経てイスパハン。29日テヘランに2週間滞在。王と会見し、即興詩を贈る。多くの会で講演、16日テヘランから国境を越えてバクダードへ。ファイサル王と会見、ベドウィンのキャンプで1日過し、戦士の踊りを見る。

6月3日、飛行機でカルカッタへ（これでタゴールの世界遍歴は終わった）。

カルカッタ大学のベンガル語教授職を引き受ける。

8月7日、ただ一人の孫ニティドロナトがドイツで没。

9月20日、ガンジーがプーナの刑務所でイギリスの分割政策（コミューナル協定）に反対して、「死に至るまでの断食」を開始。24日タゴールはプーナに向かうが、イギリスが妥協案を示したため、26日にガンジーは断食をとく。その時獄中でガンジーの枕辺にタゴールは坐っていた。

詩集『最後のオクターヴ』の制作はじまる。

12月、学長の誕生記念に議長をし、ガンジーについての小冊子を捧げる。

詩集『終焉』、戯曲「時間の旅」。

1933年—72歳

1月18日、カルカッタのセナート・ホールでのラムモホン・ライの没後100年祭に加わり、また英語で講演をする。

大学運営資金を調達するために、教員や学生を連れて、自作の舞踊劇で全インドを公演してまわる。

3月7日、シャンティニケトンで劇「厄払い」の脚色をして、出演者たちをつれてカルカッタで上演。

英国を通して外国でインドに敵対する醜聞や悪宣伝が続いていると知らされる。

4月13日、シャンティニケトンで、西洋にインドの現状を知らせる情報センター設立の必要を説き、自らはベンガル語の専門熟語集に着手。

5-6月、ダーズリンに滞在。ガンジーが再び断食を始めたため、釈放する声明を出す。ガンジーはしばらく後釈放された。

7月24日、イギリスのベンガル分割についての妥協案がベンガルのヒन्दゥ教徒に対しては



不当なものだとガンジーについて、またタゴールに対しても責任の一端ありと批判の声あがる。

9月、ボンベイでタゴール週間開催、つづいて「カードの王国」などの上演が行なわれた。

12月、アンドラ大学で連続講演（のちに『人間』と題して出版）。

詩集『多彩』、『追伸』、戯曲『チョンダリカ』、『カードの王国』、『バンショリ』、小説『二人姉妹』、『花園』

#### 1934年—73歳

1月19日、ジャワハルラール・ネルーと夫人カマラがシャンティニケトンを訪れ、タゴールはこれを歓待する。

1月15日に起ったビハール州の大地震について、ガンジーがインドのカースト制に対する呪いであるという声明を出した。これに対してタゴールは科学的な根拠を欠いた前近代的なものとして反対声明を出す。

4月3日、カルカッタに行く。7日、インターナショナル・リレーション・クラブにおいて講演。

5月6日、カルカッタより汽船でセイロンへ旅行。滞在中に最後の小説『4つの章』を書きあげる。

戯曲『スラボン月の詩』

#### 1935年—74歳

ラホールに行き、その地のヒンドゥー教徒、回教徒、シーク教徒の相互の精神的な関係について憂慮する。

7月21日、カルカッタでディネンドロナト死亡の報をうける。

10月、寺院での生き物の燔祭を支持したことに対して保守ヒンドゥー社会が不満をもらした。

11月30日、シャンティニケトンでのノパンノ祭の当日、日本人詩人の野口米次郎（ヨネ・ノグチ）が来訪。

12月、サンガー夫人と産児制限に関して討議。

詩集『最後のオクタブ』、『並木道』



「チットランゴダ」上演（ニューデリー）

#### 1936年—75歳

1月28日、作家イエーツ、ブラウンらが学園に来訪。

2月7日、カルカッタの新教育連盟（N. E. F.）において講演。

3月16日、公演の一行とともに北インドを旅行。各地を経て25日にデリーを訪れる。

ガンジーと会見。公演旅行についての反対を受けるが、60,000ルピーの資金援助を得る。

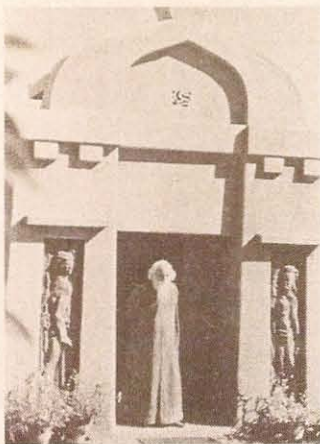
デリーの市集会、詩人歓迎の準備をするが政府の許可を受けられず。30日、デリー・ラジオにおいて朗読。

4月2日、シャンティニケトンに帰る。

7月15日、カルカッタにおいて宗教的な分割について市民ホールで講演する。28日、ナショナル・カウンシル・オブ・シビル・リバティーズ・ユニオンの議長に就任。

9月、「平和と独立を求める国際婦人連盟」の求めでメッセージを送る。10日、ベンガル語の綴り制定に寄与。

10月12日、全ベンガル婦人大会のオープニング



最晩年を過ぎた  
シャンティニケトン  
のシャモリ

・スピーチを行なう。

11月、ネルー来訪。

詩集『木の葉の皿』、『シャモリ』

#### 1937年—76歳

1月27日、カルカッタ大学の創立記念日のために歌を作る。

2月7日、カルカッタ大学の卒業式での講演をベンガル語でする。式でのベンガル語の使用はこれが最初。

3月2日、ファシズムと戦争に反対する連盟委員会の議長をつとめる。

3月3日、ラーマクリシュナ100年祭の宗教協会で講演。

4月14日、中国科学院の建物が出る。

4月末から2カ月アールモラに滞在、近代科学の入門書『宇宙入門』を書く。

8月2日、断食ストライキを続けていたアンダマン島の政治犯への虐待に抗議するカルカッタでの大衆集会で議長をつとめる。

9月10日、シャンティニケトンで突然意識を失ない、48時間も昏睡状態が続く。

10月12日、治療のためカルカッタへ。

詩集『田舎詩の絵』

#### 1938年—77歳

1月、新教育連盟大会で来訪した外国人教育関係者がシャンティニケトンを訪れる。

1月16日、アンドルースによって、ヒンディー学部礎石を作る。

2月16日、ベンガル知事夫妻シャンティニケトンを訪れる。

3月22日、ガンジーと会い、ベンガルの政治因たちの釈放に関して話し合う。

5月7日、カリンボンから「誕生の詩」がラジオを通して流れる。

8月19日、ゴゴネンドロナトの訃報に接す。

詩人ヨネ・ノグチへの最後の書簡。



画家徐悲鴻と共に

徐悲鴻の描いたタゴールの肖像画





12月9日、ロンドンでタゴールの絵画展。

詩集『境』、『夕べの光』、諷刺劇「解説の手だて」

1939年——78歳

1月31日、ネルーによってヒンディー学部開校。

5月半ばから1カ月、モンブーで過す。

8月、ネルーが中国に旅立つ前にカルカッタに会いに来る。

9-11月、再びモンブーに。全集の第1巻が発刊される。

12月21日、中国画家徐悲鴻が来訪。

詩集『はずれ詩』、『空の灯』、舞踏劇「シャマ」

1940年——79歳

2月、ガンジー夫妻シャンティニケトンを訪問、これが2人の最後の出会い。



ガンジーに歓迎の言葉を述べるタゴール

2月19日、ガンジーが去る際にビッショ・パロティの責任を担うよう懇請する。

4月5日、カルカッタでアンドルーズ没。シャンティニケトンで特別追悼礼拝。

5月3日、次兄の長男スレンドロナト没。

5月8日、世界の、そしてインドの政治的状态についてアメリカ大統領ルーズベルトに書簡を送る。

8月7日、オックスフォード大学から博士号を授与、シャンティニケトンで授与式。最高裁長官モリス・グワイア卿、ラーダクリシュナン博士、カルカッタ高裁判事ヘンダーソンがオックスフォードを代表して出席。

9月3日、雨期の祭に最後の出席。

9月17日、治療のためにカルカッタへ。医師たちの禁止にもかかわらず、19日、カリンボンに旅立つ。26日、カリンボンで突然重態になり、29日カルカッタへ、約2カ月病床につく。

11月29日、シャンティニケトンに戻る。口述で作詩をする。



最後の誕生日祝い

詩集『病床にて』、『新生児』、『笛』、小説『三人の仲間』

1941年——80歳

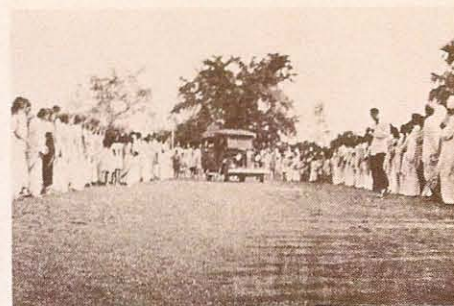
1月24日、祈り堂で最後の講演。

2-3月、「おしゃべり」の物語と詩が作られる。

4月14日、ベンガル暦の新年の最後の講演「文明の危機」。

病いが重くなり、医師たちの注告で、7月25日、カルカッタに移る。

7月30日、外科手術が施される。手術台に運ばれる前に最後の詩を口述。



シャンティニケトンとの永遠の別れ

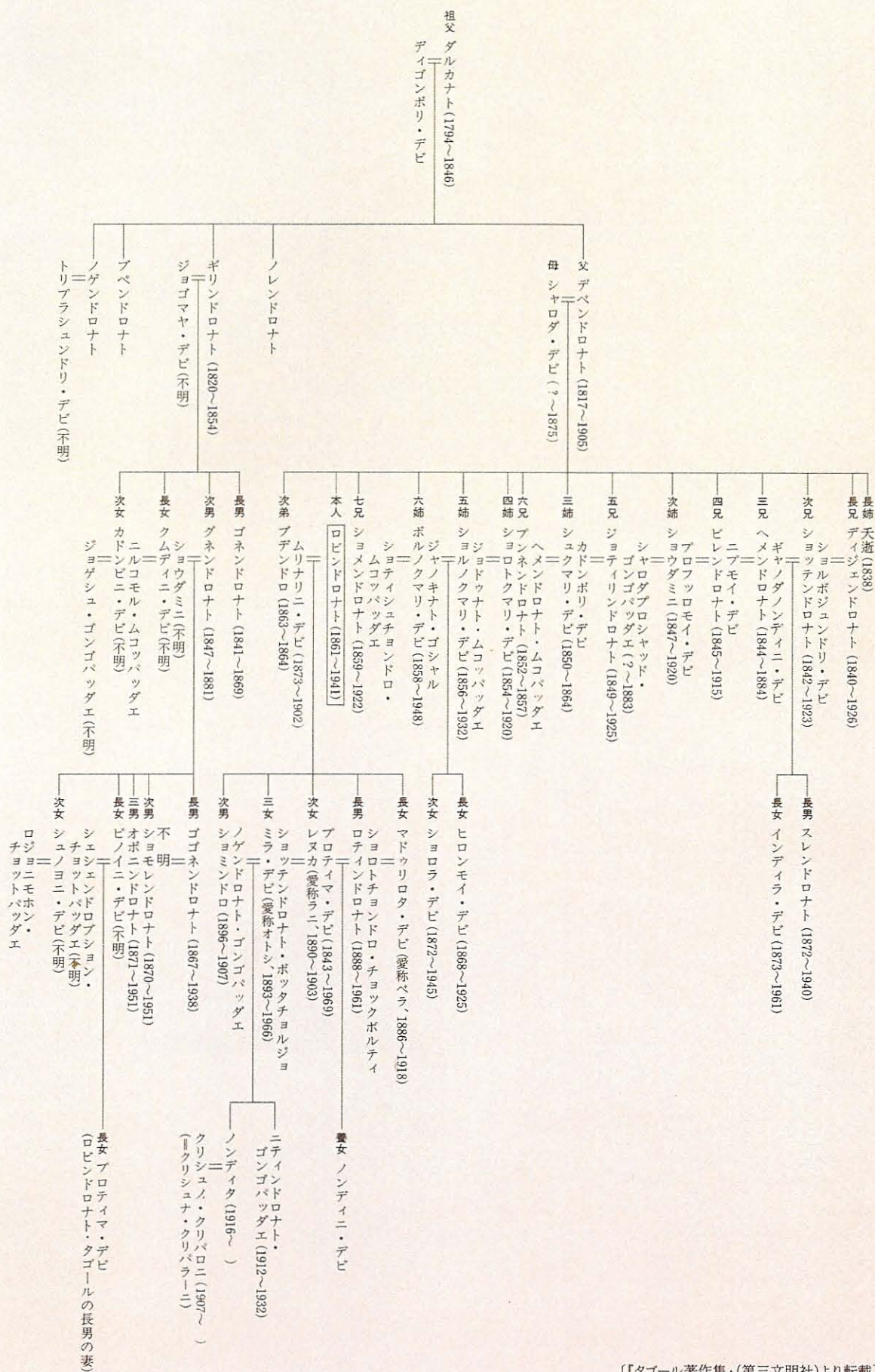
8月7日、午後12時30分に詩人は最後の息をひきとる。享年80歳3カ月。

詩集『恢復』、『田舎詩』、『誕生日に』、『絶筆』



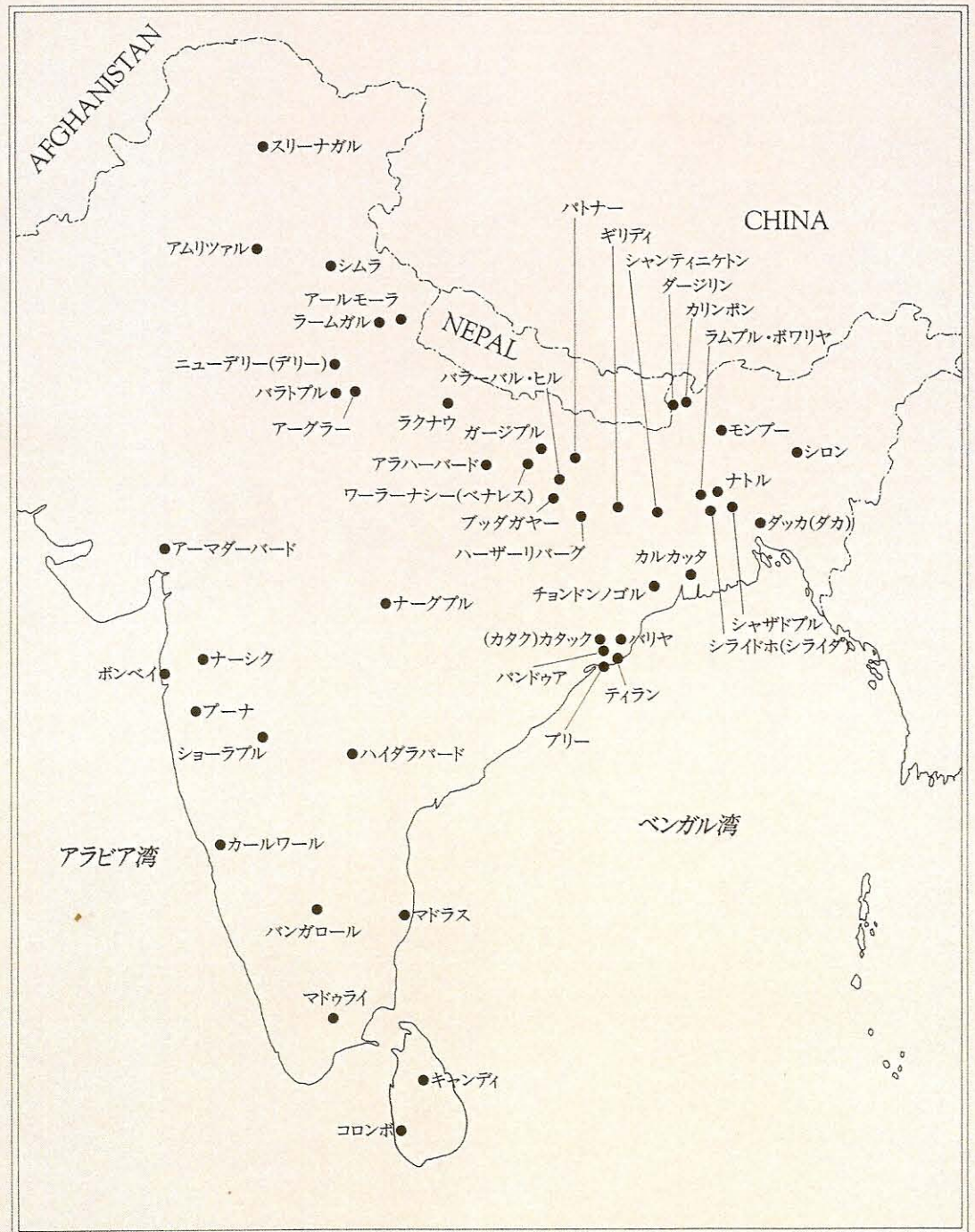
# タゴール家系図

(ロビンドロナトの兄姉の子息は主要な人物以外は省略した。)





# タゴール生存中のインド地図





依 随

「裏表紙の梵字はシャーンティ（平和の意味）、故新井慧誉＝寿徳寺住職・二松学舎教授の書」